

・ 2006年2月28日(火) 東京新聞

乱取り中に生徒倒れ入院 横浜の中学



横浜市立中学校 2004年12月、柔道部の三年男子生徒 = 当時(15) = が、元全日本チャンピオンの男性顧問教諭 = 同(26) = と乱取りをした後、意識を失って倒れ、急性硬膜下血腫や脳挫傷などで入院していたことが27日、分かった。

男子生徒は手術で命をとりとめたが、現在も記憶障害や手にまひが残っている。原因を調査した市教育委員会は「乱取りと意識不明になったことの因果関係は不明で、教諭の部活指導自体に問題はなかった」としている。男性教諭は、講道館杯全日本体重別選手権の優勝者だった。

男子生徒の父親(59)や市教委の話を総合すると、04年12月24日、部員同士の乱取りの後、教諭と組んだ男子生徒は、繰り返し投げ技をかけられた上、絞め技も二度かけられて少なくとも一度は気を失った。意識を回復して乱取りを再開し、帯を直していた際に倒れて

救急搬送された。

市教委の調査結果によると、医師の診断では絞め技と事故の因果関係はなく、その他の因果関係は判断できないとしている。また、教諭に不適切な指導や体罰もなかったとした。

父親は「市教委の内部調査では客観性が保てない。あらためて外部の立場の人に依頼し、因果関係をはっきりさせてほしい」と訴えている。

(本文は新聞の内容を忠実に転記しています)

・2006年2月28日(火)読売新聞

柔道部練習中に倒れ目まいなどの後遺症 青葉区の私立中学

横浜市青葉区の市立中学校で、04年12月、当時3年生の男子生徒(16)が柔道部の練習中に急性硬膜下血腫などで倒れ、現在も目まいなどの後遺症があることが、27日の市議会予算特別委員会で明らかになった。男子生徒は、倒れる前に顧問の男子教諭(27)の絞め技で一時、意識を失った。市教育委員会は「練習と倒れたこととの因果関係は不明。行き過ぎた指導はない」としている。

市教委によると、男子生徒は12月24日の部活動中、男子教諭の絞め技で意識を失った。すぐに意識を取り戻して練習を続けたが、約10分後再び意識を失い、救急車で病院に運ばれて緊急手術を受け、05年1月中旬に退院した。市教委は昨年6月、練習との因果関係などを調べるため、執刀医やほかの部員などから聞き取り調査を行ったが、執刀医は「因果関係は分からない」と答えたという。

市役所のモニターで委員会の様子を見ていた父親(59)は「息子は脳の病気などなく、練習が原因としか考えられない」として、市教委に外部調査の実施を求めている。

横浜市青葉区の市立中学校で2004年12月、当時3年生の男子生徒(16)が柔道部の練習中に急性硬膜下血腫などで倒れ、現在も目まいなどで倒れ、現在も目まい

目まいなどの後遺症があることが、27日の市議会予算特別委員会で明らかになった。男子生徒は、倒れる前に顧問の男子教諭(27)の絞め技で一時、意識を失った。市教育委員会は「練習と倒れたこととの因果関係は不明。行き過ぎた指導はない」としている。

市教委によると、男子生徒は12月24日の部活動中、男子教諭の絞め技で意識を失った。すぐに意識を取り戻して練習を続けたが、約10分後、再び意識を失い、救急車で病院に運ばれて緊急手術を受け、05年1月中旬に退院した。市教委は昨年6月、練習との因果関係などを調べるため、執刀医やほかの部員などから聞き取り調査を行ったが、執刀医は「因果関係は分からない」と答えたという。

市役所のモニターで委員会の様子を見ていた父親(59)は「息子は脳の病気などなく、練習が原因としか考えられない」として、市教委に外部調査の実施を求めている。

(本文は新聞の内容を忠実に転記しています)

横浜市教委報告 執行医が疑問視 元柔道部員後遺症問題「都合いい部分のみ」



横浜市青葉区の私立奈良中学校で2004年、柔道部の練習中に部員の男子生徒(当時3年生)が顧問の男子教諭から技をかけられた後に倒れ、現在も後遺症を抱えている問題で、手術を行った脳神経外科医(37)が、市教委の事故原因報告を疑問視していることが8日、分かった。医師は「市教委に都合のいいことしか書かれていない。私が言ったことのすべてを伝えていない」と話している。(桐生 勇)

市教委報告は傷病の原因について「発症原因は判断できない」「教師の瑕疵を認めることはできない」—などとした。しかし、神奈川新聞の取材に対し、医師は「確かに(柔道との)因果関係は断定はできないと言った。しかし、『状況から柔道による可能性が高い』とも話した。さらに、強い回転により脳内の静脈に損傷があったと伝えた際、『恐らく投げ技など

によるもので、絞め技などによるものではない』と説明した」と指摘。

市教委が「担当医は絞め技と事故の発生に因果関係はないと述べている」と報告している点について、「間違っはいいないが、都合のいい部分しか示していない。私の見解が正確に反映されていない」と述べた。

医師は、事故後の05年8月、市教委から約15分間の聞き取り調査を受けたという。後日、医師は市教委から、報告の基となる聞き取り結果の提示を受け、記載された内容について語尾の表記などを手直した。医師は「今後、あらためて主治医としての見解を述べてもいい」と話している。

医師の指摘に対し、市教委は「聞き取り調査をもとにメールでやりとりして医師の公式見解として作成した。医師の了解も得ている。われわれも柔道との因果関係は否定していない。調査は今後も続けていく」としている。

市教委によると、男子生徒は04年12月24日、同中の柔道場で顧問とけいこし、絞め技で気絶。正気を戻した後も顧問教諭とけいこを続け、再び投げ技をかけられ、絞め技を受けた。その後、帯を直していた際に突然倒れ、病院で硬膜下血腫などの診断を下され開頭手術を受けた。生徒は現在も記憶力低下など高次脳機能障害の後遺症を抱えている。

(本文は新聞の内容を忠実に転記しています)

柔道部員脳挫傷「投げ技による可能性大」主治医指摘 市教委と食い違い



横浜市青葉区の市立奈良中学校で04年12月、柔道練習中の男子部員(当時3年)が男性顧問教諭から投げ技をかけられた直後に倒れ、今も脳挫傷などの後遺症を抱えている問題で、治療にあたった主治医(37)が顧問の行為とけがの因果関係を指摘し、市教委に対して「(けがは)投げ技による可能性が高い」と説明していたことがわかった。市教委はこれまで「原因が特定できない」として顧問の責任を否定していたが、市教委側が医師の説明を一方的に解釈し、真相の説明と責任の明確化を避けた疑いも出てきた。

この医師は昨年8月中旬、市教委の担当者2人に直接会って、部員のけがの症状や後遺症、原因などについて約15分間説明した。その際、脳挫傷のほかに、部員が受けた外傷性急性硬膜下血腫について「頭の中の太い静脈が破裂するには頭を軸にした速い回転がかかったことが考えられ、投げ技による可能性が高い」と伝えたという。また市教委から「絞

め技は関係はあるか」と聞かれ、「絞め技によるものとは考えにくい」とも答えたという。

問題が明るみに出た2月27日の市議会予算第一特別委員会議事録を、医師がインターネットで確認したところ、市教委が医師の見解の一部だけを引用して、けがと柔道との因果関係がないように表現している事を知ったという。主治医は朝日新聞の取材に対し、「市教委が言っていることは必ずしも間違いではないが、都合の良い部分しか取り上げていないと感じた」と話している。

これに対し市教委は、「医師からは『投げ技によるものとは断定できない』という公式見解で了承を得ている。面談後には、こちらがまとめたものをメールで添削してもらった」と話し、「公式見解として了解を得るための手続きは踏んでいるはずだ」として医師との食い違いをみせている。

これについても医師は「投げ技による可能性は高いが、医師の中立的な立場から断定はできないと言った。公式見解で『可能性が高い』の部分が無視されている」と話している。

(本文は新聞の内容を忠実に転記しています)

・2006年3月24日(金)朝日新聞

「どうして」両親不信
柔道部員、脳に重傷 生徒へ聴き取り半年後
最終報告因果関係を巡り医師と食い違い

柔道部員 脳に重傷 生徒へ聴き取り半年後
最終報告 因果関係を巡り医師と食い違い



けがの原因に関する報告書など書類をまとめたファイルは数冊に及び、相模原市内で

相模原市立奈良中(青葉区)の男子生徒が04年12月、柔道の練習中に顧問に技をかけられた後に倒れ脳挫傷などで重傷を負った問題で、現在相模原市に住む生徒の両親が朝日新聞の取材に応じ、これまでの経過や現在の心境を語った。「事故がどうして起きたのかがいっこうにわからない。調査を引き延ばし続けるように思う」と、横浜市教委や学校への不満と不信感を明らかにした。当時の生徒たちへの聴き取りが事故から半年以上後だったことや、警察への届け出や専門家への依頼がなかったことを挙げている。

「どうして」両親不信

横浜市立奈良中(青葉区)の男子生徒が04年12月、柔道の練習中に顧問に技をかけられた後に倒れ脳挫傷などで重傷を負った問題で、現在相模原市に住む生徒の両親が朝日新聞の取材に応じ、これまでの経過や現在の心境を語った。「事故がどうして起きたのかがいっこうにわからない。調査を引き延ばし続けるように思う」と、横浜市教委や学校への不満と不信感を明らかにした。当時の生徒たちへの聴き取りが事故から半年以上後だったことや、警察への届け出や専門家への依頼がなかったことを挙げている。

(柴田菜々子、柿崎隆)

両親などの話によると、生徒が倒れたのは04年12月24日午後3時50分ごろ。柔道部顧問の男性教諭(当時26)に投げ技や絞め技をかけられた

た直後、帯を締め直す途中に意識を失った。頭の右側の太い静脈が破れ脳内出血しており、緊急手術で一命は取り留めた。

約3週間後に退院したが、直後は極端に記憶力が低下していて、簡単な文字も思い出せなかった。現在は高校に通っているが、最近でも、テスト期間中は勉強しても次の日に忘れてしまうので精神的に不安定になるという。学校から帰るときも、電車で寝過ごして別の駅に着くと、どこかわからなくなってパニックになることもあるため、全地球測位システム(GPS)付きの携帯を持たせている。「学校との行き来が簡単になるように」と今年1月、乗り換えがいない駅の近くに一家で引っ越した。

事故後の昨年1月から3月にかけて計4回、両親は市教委の指導主事や学校と協議したが、この時点で、現場にいた生徒や医師、専門家への聴き取り調査はなかった。学校側は、調査をしなかった理由を「部員の保護者から『生徒の心理面に配慮してほしい』という要望があったから」と、説明している。

昨年6月、両親は地元の市議を通し市教委に調査を改めて要望。生徒や外部の専門家計42人への聴き取り調査が始まった。事故からすでに半年がたっていた。

昨年12月、市教委は両親に最終報告した。報告書では「医師は絞め技によるものとは考えにくいと話した。原因は断定できない」とされていた。

だが、生徒を治療したその医師は朝日新聞の取材に対し、「頭を軸とした高速の回転が静脈破裂の原因とみられ、投げ技による可能性が高い」と、柔道によるけがの疑いを指摘した。市教委にも同様の説明をしたという。そのうえで、報告書について「絞め技との因果関係を否定する部分だけを載せて、都合の良いように解釈している」と話している。

この溝は埋まっておらず、市教委は今後改めて主治医、警察から話を聴くという。

両親は「人の記憶はどんどん薄れていく。迅速かつ詳細な調査が必要なのは当然なのに、調査が遅い」と話す。

一方で両親は刑事告訴や民事裁判の提訴は今のところ、考えていないという。「専門医に聞くと、回復が一番良いのは、楽しいことや面白いことをたくさん経験させることのような。訴訟を起こせば、私たちのいらいらを息子が感じてパニックにつながってしまう。『いま息子にとって一番大事なのは、穏やかな暮らし』と思っている」

一方、男性教諭は、現在も同中学の柔道部で顧問を務めている。学校を通して「事故が発生し、申し訳ないという気持ちと、取り返しがつかないことが起きてしまったという気持ちでいっぱい。正直、同じことが起きてしまうのではないかなどとってしまう」とコメントしている。

(本文は新聞の内容を忠実に転記しています)